

“The Hilltop Hotel”, Designed by W.M.Vories (1) -Impressions from Various Writers-

**Yasuyuki Nakamori
Ayumu Yamakawa**

Summary

W. M. Vories (1880-1964) designed many houses, churches, school buildings and others. Many people feel that they are attractive and comfortable. However, there are no evidence explaining why they are attractive and comfortable.

But exceptionally, many writers told the impression about the Hilltop Hotel. In this research, we gathered their comments about the Hilltop Hotel as much as possible. And we analyzed the meaning of that comment.

Hilltop Hotel

The Hilltop hotel was not originally constructed as a hotel. It was built by Keitaro Sato in 1937 as "Sato Shinko Seikatsukan" aiming at improving the Japanese life style .

ヴォーリス建築：山の上ホテル (1)

－作家の証言が意味するもの－

中 森 康 之
山 川 歩 夢
(本学大学院生)

1. はじめに

神田駿河台に小さなホテルがある。昭和の文人が愛したホテルとして知られるその「山の上ホテル」は、W.M. ヴォーリス (1880～1964) によって設計された。

ヴォーリスは、キリスト教伝道の志をもち、1905年(明治38)に滋賀県立商業高校の英語教師として来日した。しかし放課後自宅で開いたバイブルクラスがあまりにも盛況を極め、仏教界や地域住民から問題視されるようになる、そして2年後の契約更新の際にバイブルクラスをやめることを受け入れなかったため、契約が更新されなかった。

英語教員離職後、ヴォーリスは様々な活動を行ったが、その一つが建築設計である。ヴォーリスは全国各地の、大学、小学校、教会、YMCA 会館、病院、百貨店、住宅など多数の建築設計を行い、それらは「ヴォーリス建築」と総称されている。

ヴォーリス建築をめぐる現象で特徴的なのは、一般のファンが非常に多いということである。ヴォーリスが生涯を過ごした近江八幡などで定期的に行われているヴォーリス建築見学ツアーは毎回非常に人気があり、ヴォーリス建築の保存再生活動を行っている個人や団体が、全国各地に多数存在する。

もちろん研究者による分析も行われている。例えば様式や意匠などの分析により、ヴォーリス建築を建築史に位置づける試みを続けている山形政昭は、神戸ユニオン教会について、次のように解説している。

神戸ユニオン教会においても、三角形の敷地に対して、中央に設けた玄関ホールの北に会堂と集會社交室を置き、南に幼稚園の教室と、牧師館を組み入れた多用途に対応する計画が

なされたものであり、建築意匠的にはゴシック様式を基調にする一方、ハーフティンバーの木骨造表現、ハンマー・ビームを用いた造形的な木造トラス小屋組構法など、特色の多いデザインが展開されているものです。¹⁾

しかしその一方で、必ずしも建築史に明るい訳ではない一般のヴォーリズファンが異口同音に語るのは、「懐かしい感じがする」「温かい感じがする」「落ち着く」「安心する」等々、建物の内部空間に足を踏み入れたときの実感である。これは偶然ではない。「建築物の品格は、人間の品格の如く、その外装よりも寧ろ内容にある」²⁾と述べているように、ヴォーリズ自身が、建築物の内部空間が人間に与える影響を大切にしていたのである。

それは、ヴォーリズが、神戸女学院の設計について、次のように語っていることからわかる。

校舎が生徒の精神経験に及ぼす影響と言うものを信じないならば、学校建築の設計は、それが如何様に大きく、又立派であらうとも非常に興味の少ないものである。³⁾

その神戸女学院の校舎で21年間を過ごした内田樹は、自身の経験と実感から、次のように述べている。⁴⁾

ヴォーリズの建物は造形的にはそれほど美しいものではない。彼の真価は其中で暮らさないとわからない。(略)

何よりも暮らす人たちの心と身体を安らかにすることを彼は気づいたのである。(略) 建築は美術品ではない。そこに暮らす人たちを久しきにわたって守り、励まし、癒すものでなければならぬ。ヴォーリズはそう信じていた。

このような内田の分析や、「懐かしい」とか「暖かみがある」といった一般の人々の感想によって、ヴォーリズ建築を建築史に位置づけるのは非常に難しい。定量評価できないからである。しかしながら、ヴォーリズ自身が建物の内部を重要視し、そこで長年過ごした人が、ヴォーリズ建築の真価は「其中で暮らさないとわからない」と述べている以上、それを探究せずにヴォーリズ建築の魅力や意味を考えることはできない。

そこで、ヴォーリズ建築の意味や価値を解明するための基礎研究として、ヴォーリズ建築についての証言を収集することとした。

本稿では、作家や編集者の証言が多い「山の上ホテル」を取り上げる。

2. 作家たちの証言

昭和の作家や編集者が山の上ホテルを愛し、それについての証言を多く残していることは、よく知られている。しかしこれまでは、それらが断片的に紹介されるのみで、網羅的に収集し、分

析した研究はない。そこで本研究では、山の上ホテルについての作家や編集者の証言を可能な限り収集し、その特徴を分析することとしたい。

2.1. 三島由紀夫（1925～1970） 作家

東京の真中にかういふ静かな宿があるとは思はなかつた。設備も清潔を極め、サービスもまだ少し素人つぽい処が実にいい。ねがはくは、ここが有名になりすぎたり、はやりすぎたりしませんやうに。⁵⁾

『仮面の告白』『金閣寺』などの代表作を持つ三島由紀夫は、創業して間もない頃から山の上ホテルを利用していた。『山の上ホテルの流儀』⁶⁾には、「決まった時間になるとお食事をお持ちするのですが、いつも内鍵がかかっている、何やら物々しい雰囲気だったようです」とある。

三島は、静かさ、設備の清潔さを讃え、加えて多少の素人感で親しみやすいサービスを行うところが良いと評価していたのである。

2.2. 石坂洋次郎（1900～1986） 作家

山の上ホテルは足場がよく、閑静で、眺めがひろく、料理もおいしい。そして、清楚な雰囲気がなによりも好ましい。

私はここに泊って、夜はよく眠り、昼間は大いに仕事の能率をあげることが出来た。⁵⁾

2.3. 檀一雄（1912～1976） 作家

何処ガ気ニ入ツタカト云ハレルト困ルケレド コノ頃 私ハ遊ブ時 仕事ノ時 大抵 山ノ上ホテルニ出掛ケテ行ク。⁵⁾

檀一雄の代表作『火宅の人』には、山の上ホテルが登場する。

2.4. 高見順（1907～1965） 作家

できることならば俺はこのホテルで死にたい。⁶⁾

高見順は山の上ホテル1階のバーを利用しており、晩年は癌になっても山の上ホテルを利用していたという。

2.5. 堀内敬三 (1897 ~ 1983) 作曲家、作詞家、訳詞家、音楽評論家

山の上ホテルは清楚快適まことに居心地のよいホテルです。⁵⁾

2.6. 尾崎士郎 (1898 ~ 1964) 作家

清楚ですっきりした感じがいい。不思議に心の落ち着くのは空気に調和があるからであらう！（昭和30年代使用ホテルパンフレット）⁶⁾

2.7. 長崎抜天 (1904 ~ 1981) 漫画家

都心でこんな静かなところがあったとは 教えられて 来て 泊って 教えてくれた友達に感謝している。⁵⁾

2.8. 池波正太郎 (1923 ~ 1990) 作家

「×月×日
猛暑つづく。牛の歩みのような速度で、少しずつ、原稿を書きすすめる。先般、山の上ホテルへ三日ほど泊ったのが、私の夏休みだった。仕事もせず、ベッドへ寝転んで、ぼんやりしていただけだ。」

「×月×日
きょうは、午後から山の上ホテルへ入る。
ケン玉を持って行き、仕事の合間に、久しぶりでやってみる。子供のころの私はケン玉の名人を自称していたものだが、数年ぶりにやってみて、勘が狂ったというよりも、手がおもうようにうごかなくなっていることに愕然となる。」

「×月×日
〔山の上ホテル〕を引きはらって帰宅する。このホテルへは初めて泊ったのだが、こうした仕事をもって泊るには、東京で得難いホテルだ。ことに本館は、部屋の数が少ないから、サーヴィスの目が行きとどくのだろう。」（『池波正太郎の銀座日記』新潮社、1991）

本館三十五室、新館が四十室という山の上ホテルは、東京に林立する大ホテルに比べると、プチ・ホテルといってよいだろう。

それだけに従業員の神経は隅から隅まで行き届く。

掃除を担当する婦人たちまでが気を配ってくれる。(『Winds』1983年12月号 引用は注5)による)

山の上ホテルへ行き、天ぶらのコーナーに座る。主任の近藤君が、ポン酢へ入れた鱸の卵、塩焼のカマなどを出してくれる。いまは鱸の食べどきだ。今日は薄造りにしてもらおう。天ぶらを食べたあと、下のコーヒーパーラーで主任の川口君が、ジャマイカのコーヒーを入れてくれる。⁶⁾

毎日、曇っていて寒い。でもホテルの部屋は自分の家の部屋より広いから、いちいち体をうごかしていると相当の運動になる。何から何まで自分でやらなくてはいけないが、このごろは辛くなってきた。

夜は、コーヒーパーラーに行き、いつもの小さなビーフ・ステーキ、コンソメ・スープ、デザートに小さなケーキを食べる。しかし、食欲はなし。

昨日は天ぶらコーナーに行き、いろいろ食べたが、やはり食欲が出ない。すっかりやせてしまった。仕事もせず、のんびりホテルに泊まっているように見えるが、もう、そろそろホテルへ一人で泊まることもむずかしくなってきたようにおもう。

二度も三度も、部屋の中で転倒する。足がすべるのだ。⁶⁾

ホテルにせよ、料理店にせよ、本に書かれていたりして評判になったりすると、たちまち客が増え、経営の手がひろがり、質が落ちるといふ。私もその実例をいくつも見てきた。だが、よい評判がたち、客が増えて質が落ちるようなところは、本物ではない。評判のよかったときの経営の姿勢をくずさなければよいのだ。簡単なことなのだが、それがなかなかむずかしい。⁶⁾

『山の上ホテルの流儀』によると、池波正太郎は、山の上ホテルを「気持ちのよい宿」として晩年よく利用しており、エッセイを書いたり、絵を描いたり、直木賞の候補作を読んだり、時には息抜きの別荘のように使っていたという。チェックアウトの際には必ず翌月の予約を入れていたほどで、池波が好んだ本館401号室は「池波ルーム」と呼ばれるほどだった。本館一階にあるバー「ノンノン」の前にあるロビーもお気に入りの場所で、従業員と世間話をしていたという。ホテル従業員からも非常に評判が良く、人柄を表すエピソードとして、座卓を汚さないようにビニールカバーを持参し、座卓にかけて利用していたことが残されている。

池波は亡くなる二日前にも、天井を病室に届けて貰ったという。

2.9. トーベ・ヤンソン (1914～2001) 『ムーミン』の原作者

戴いたバラの花に強い印象を受けました。日本旅行の思い出として、何時までもわたしの胸に残るでしょう。若さ溢れる雰囲気一杯の学生街——。合理的なホテルは方々で見かけますが、行き届いた親切で迎えてくれるところは少ない様です。⁶⁾

2.10. 丸谷才一 (1925～2012) 作家

私も、ホテルは〔山の上ホテル〕が一番好きです。というのは、私たちの商売は朝が遅いでしょう。十一時をすぎると、今度は、一品料理で朝ごはんを作れと言って頼むわけですよ。するとまた作るんだな、あそこは(笑)。こういう親切さは、他では味わえない感覚ですね。(『山口瞳対談集4』論創社、2009)

2.11. 常盤新平 (1931～2013) 作家

山の上ホテルからは私も「誠意と真実」をいただいたと思っている。それはごく些細なサービスからもわかるものだ。秋山さんがひょっこり訪ねてきた部屋は三〇九号室(和室)で、デスクと椅子はあったが、畳にどっしりとした座卓がおかれていて、灰皿も山の上ホテルのロゴマークのない大きなものだった。井合さんが改築前の本館の各客室を写真に撮っていて、三〇九号室の写真をを見せていただいたときは、この部屋でいろんなことがあったのを思い出した。⁷⁾

山の上ホテルの居ごちのよさは一泊ただけではわからないだろうが、何度も二泊か三泊するうちに、いいホテルだとしみじみ感じるようになる。客室が本館三十五、新館四十の「小型ホテル」だから、巨大なホテルのように長い廊下を歩いて、自分の部屋に行くこともない。(同)

山の上ホテルに私が長くいられたのは、いろいろな理由があるけれど、一つには朝食が楽しみだったからだろう。朝の洋食はおそらくほかのホテルのそれと変わらない献立であるが、ジュースもベーコン&エッグもトーストもサラダもコーヒーもうまい。一つひとつに料理人の手がかかっていることをうかがわせる。(同)

山の上ホテルはどのホテルともちがっていた。吉田社長が言っていたように、山の上ホテルは西洋のホテルのよさと日本の旅館のよさを兼ねそなえた、どこにもないホテルだったのである。(同)

2.12. 久住純 作家

〔山の上ホテル〕には和洋中のレストラン、カフェ、バーの数も多いので、神保町での本探しの帰りなどに、たまに訪ねてはいかがだろうか。いつだったか、ホテルのバーで編集者と夜遅くまで飲んだことがある。最後にスコッチをダブルで飲んでいこうや、ということになって注文したところ、なみなみと注がれてビックリしたことがある。私たちが飲み干すまで、とっくに営業時間を越えているはずなのに、バーテン氏は視線をあわせるわけでもなく、それでいて笑顔で付き合ってくれたものだ。（『池波正太郎が愛した宿』夏目書房、2000）

かつての神保町には老舗のレストランや喫茶店も多かったが、残念ながら最近は自身をもって薦められる店は少なくなった。駿河台の町並みも変化がいちじるしく、〔山の上ホテル〕だけが、どことなく良き時代の孤塁を守っている趣がある。（同）

2.13. 今江祥智（1932～2015） 児童文学作家

昔、よく旅をしていたおやじさんが「お前も一人前の大人になったら、ええ常宿をもつようになることや」と言っていたのを思い出す。ここ（山の上ホテル）は私にとって上宿の常宿なのである。東京の寄港地の最もたるもの、なのである。（『産経新聞』1997年12月26日 引用は注5）による）

山の上ホテルの朝食はとても美味しい。⁵⁾

小さなホテルだからお客も少なく、人の出入りがうるさくない。小さなホテルだから、館内で迷う、なんてこともない。（同）

2.14. 山口瞳（1923～1995） 作家

ホテルでは山の上ホテルが一番だ。一番だというのは一番上等だという意味ではない。一番好きだと言ったほうがいいかもしれない。その「好き」の内容は「気持が安らぐ」もしくは「自分の家に帰ってきたようだ」ということになろうか。（『行きつけの店』ティービーエス・ブリタニカ、1993）

胃腸の具合の悪いことをフロントの人と立話のときに話すことは話した。午後四時頃だったと思うが、秋山さんから部屋に電話があって、天ぶらの食堂にお粥が用意してあるという。私は、本当に「地獄で仏に会った」という思いをした。こんなフロントは絶対にないと私が

言うのは、こういうことである。(同)

泊った回数で言うと、ホテルニューオータニと銀座東急ホテルが多かったのだけれど、ニューオータニは増築以前から広大過ぎて気持がふわふわしてしまうし、東急ホテルは行きつけの小料理屋と目と鼻の先きというのが、かえって具合が悪い。(略)こう考えてくると、私は、どうも、ホテルむきの人間ではないような気がしてくる。(『衣食足りて』河出書房新社、2006)

私が山の上ホテルに求めるものも、山の上ホテルが私に与えてくれるものも「安心感」である。私は、そもそも町なかの小さなホテルが大好きなのだが、こんな山の上ホテルのようなホテルが現代に残っているのは奇蹟のように思われて仕方がない。すべては社長の吉田俊男さんの御人柄のせいだと思っている。(『行きつけの店』)

直木賞を受賞して、家にいられない状態になったので『山の上ホテル』へ入れてもらったんですけどね、非常に親切だった。だけど一面、ホテルへ泊まる時はドライな感じを求めるということもあるでしょう。それで以後行かなかったんですが、齢をとって体が弱ったりなんかするとね、やはりあのフロントの親切さというのは部類に有難いですね。(『山口瞳対談集 4』)

(丸谷)東京には、山の手と下町がありますね。私は山形県から東京に出てきた人間でしょう。それで直感的、実感的に言うと、道を開いて非常に親切に教えてくれるのが下町で、あまりよくないのが山の手ですね。今はどうなんですかね。私が昭和十年代の末頃に東京へ出てきた時は、そういう区別が実にはっきりとありました。

(山口)その傾向は今でもあるでしょうね。だいたい希薄になったとは思いますがけれど。

(丸谷)昭和十年代に東京の下町で道を教わった時のような、ああいう無償の行為的親切さ、少しお節介の度が過ぎるんじゃないかとさえ思うような感じ、そういうものには、僕は日本のほかの町で出会ったことがありませんね。

(山口)人なつっこいでしょう、下町の人は。私がそれを一番感じるのは、ホテルで仕事をする時なんです。いつもは場所的にも頃合いだと思って、銀座のホテルに行くことが多いんです——「帝国ホテル」は、吉行淳之介さんがいるから行かないけど(笑)。この頃は神田の『山の上ホテル』に行くんです。あそこには、今あなたがおっしゃったような下町情緒みたいなのがありますね。フロントもだけれど、買い物に行ってもとても親切。下町ですね、あれ。神田ですものね。」

(丸谷才一との対談 『山口瞳対談集 4』)

神田の山の上ホテルなら、社長はじめ秋山小兵衛殿、近藤梅安殿、川口平蔵殿、小林鬼平殿など妻も親しくしている人が多い。山の上ホテルは万事につけて「程がいい」のが良く、ひとつだけということなら僕にはボーイもメイドも初々しいのが嬉しい。(『年金老人 奮戦日記』新潮社、1994)

これは僕等夫婦にとっては避暑である。

山の上ホテルの良さは一にも二にも従業員の躰の良さだと思っている。親しみをこめて接してくれるが決して馴れ馴れしくはならない。節度がある。(同)

山の上ホテルの従業員は、誰もが素人っぽく見える。初々しい。秋山さんにしても、他のホテルのフロントの人間のように、何でも事務的に処理するという、いわゆるプロらしさがない。しかし、どの従業員も話をしてみると、あるいは用事を頼んでみると、とても確りしているのがわかる。もしかしたら、私が山の上ホテルを好むのは、このことかもしれない。(『行きつけの店』)

山口瞳は、山の上ホテルに作家として活動する以前も、河出書房の雑誌『知性』の編集者として利用していた。その後作家となっても山の上ホテルを利用し続け、長い間ホテルを愛していたのである。

また、山口は吉田俊男を心から尊敬しており、吉田の死に際して、「山の上ホテルの社長の吉田俊男さんが亡くなったのは痛恨事である。吉田さんに私の絵を買っていただくというのが私の願いのひとつであったが、その絵を差しあげて吉田さんが車椅子でもって飾る位置を指定したのが社長の最後の仕事になったと聞いている。吉田さんは私の尊敬する人の一人である。山の上ホテルは駿河台下のほうから行くと急な坂を登ることになるが、大雪が降ると吉田さんは社員に命じて徹夜で雪掻きをさせたそうだ。むろん、客に万一のことがあってはいけないという配慮からだ。私は、この坂を吉田坂と命名してもらいたいと本気で願っている」(『行きつけの店』)と述べている。

2.15 鍋井克之 (1888 ~ 1969) 洋画家

風景画家にとって、旅の宿ほど気にかかるものはない、このホテルには入ると、ホッと安心して助かった思ひである。悪口を書くつもりでゐたら、ついほんとうのことを先きに書いてしまった、⁵⁾

2.16. 証言の特徴

以上、山の上ホテルをめぐる主な証言を列挙したが、これ以外にも川端康成、松本清張、島尾

敏雄、安岡章太郎、小田実、水上勉、野坂昭如、山本健吉、田辺聖子、田村隆一、開高健、伊集院静、井上靖、中村眞一郎、吉行淳之介、五味康祐、小林秀雄、吉田健一、舟橋聖一、鶴見俊輔、中野好夫、荻昌弘、岩城宏之等も、山の上ホテルを利用していたことが知られている。中には、池波正太郎の本館 401 号室、開高健の本館 201 号室、山本健吉の別館 427 号室のように、お気に入りの部屋があった者も少なくない。

さて、これらの証言から、どのようなことが言えるだろうか。

一つは、山の上ホテルという建物の様式や意匠などの外観についての証言は、少なくとも今あげた中には存在しないということである。証言を残しているのが建築家ではなく、作家を主とした文化人であるのだから、当然と言えば当然である。彼らの多くは、立地も含め、山の上ホテルで自身が時を過ごした経験の意味、つまり、山の上ホテルで過ごすという経験が、自分自身の感性にどのような影響を与えるのかということ語っていたのである。そのとき使われているのが、「居心地がいい」「不思議に心が落ち着く」「安心感がある」「清楚な雰囲気」などの言葉なのである。

ヴォーリズ建築を考えると、このことは非常に重要である。なぜなら先に見たように、ヴォーリズ自身が設計において、建物の内部空間が人間に与える影響を強く信じており、それに細心の注意を払っていたからである。その意味で、作家たちは、ヴォーリズの設計思想、設計にあたっての思いや志、気遣いを見事に受け取っていたと言えるだろう。

では、ヴォーリズは、山の上ホテルの設計にあたって、その思想・志・気遣いを、具体的にどこにどのように表現したのであろうか。普通はこのように問いたくなる。しかし、ヴォーリズ建築においては、この問いは必ずしも有効ではない。もちろん、例えば柱の太さだとか、間取りだとか、階段の手すりだとか、そのような「物」を分析すれば、そこにヴォーリズの思想や気遣いのある程度読み解くことができる。しかしながら、ヴォーリズは、そのような個別の「パーツ」で何かを表現しようとしたのではない。個々のパーツの有機的連結によって、もっと言えば、全てのパーツによって、全体としてその建物に最も相応しい内部空間を創造しようとしていたのである。その証拠に、作家たちも、なぜ居心地がよいのか、なぜ落ち着くのかという原因を具体的に特定してはいない。ただ檀一雄が「何処が気ニ入ツタカト云ハレルト困ルケレド」と言い、常盤新平が「山の上ホテルの居ごちのよさは一泊しただけではわからないだろうが、何度も二泊か三泊するうちに、いいホテルだとしみじみ感じるようになる」と述べるにとどまっているのである。神戸女学院のヴォーリズ設計の校舎で 21 年という時を過ごした内田樹が、「中で暮すと（僕は 21 年暮しました）建築家の暖かい気配りと奔放な想像力をしみじみ実感します⁸⁾」と述べているのも同様である（ただし内田はかなり具体的にそれを分析している）。

もちろん私たちは、事後的に、作家自身よりも詳しくそれを分析することはできる。しかし今は、まず作家たちの証言に寄り添ってもう少し考えてみたいと思う。なぜなら山の上ホテルの魅力は、単にヴォーリズが設計したと言うだけでは説明できないからである。そしてそのことを、作家たちは語ってくれている。どういうことか。

先にあげた作家たちの証言を見ると、従業員のサービスについての言及が目立つ。そしてこれ

は偶然ではなく、創業者である吉田俊男の人柄と極めて強い意志によるものであることが伺える。

そしてもう一つ、作家たちは語っていない重要なことがある。それは、山の上ホテルは、そもそもホテルとして設計されたのではない、という事実である。

3. 山の上ホテルの歴史

3.1. 山の上ホテル概要

山の上ホテルは、1937年（昭和12）、実業家佐藤慶太郎によって、佐藤新興生活館として建設された。設計はW. M. ヴォーリズ。その後、第二次世界大戦中に帝国海軍、戦後はGHQ陸軍婦人部隊に接收され、米国将校の社交場や宿舎として利用された。⁶⁾ さらにその後GHQ接收解除を機に、山の上ホテルの創業者・吉田俊男が佐藤家から借り入れる形で、1954年（昭和29）1月20日、山の上ホテルを開業したのである。

ホテル名である「山の上」の由来は、GHQ接收時にアメリカ人の間で愛称とされていた「Hill top」を、創業者の吉田俊男が「丘の上」ではなく、あえて「山の上」と意識したことによる。創業時は客室が47室、従業員は7名の小規模なホテルであった。その後1970年（昭和45）に別館（新館）を建設し、1980年（昭和55）には本館の改修が行われ、小さなホテルという特徴を残しつつホテルの規模とサービスの質を向上させた。創業を開始した1954（昭和29）は、一般の宿泊客がホテルを利用することはあまりなかった。そのため、吉田俊男はホテルとはジャーナリストや作家たちにとっての社交場であると考え、「文化人のホテル」というキャッチコピーを掲げた。

また、山の上ホテルは、規模に比して、バーやレストランが充実している。中でも有名なのが、「天ぷらと和食 山の上」や「バー ノンノン」である。

ところで、佐藤慶太郎とは何者で、佐藤新興生活館とは一体何なのか。

3.2. 佐藤慶太郎と佐藤新興生活館

齊藤泰嘉『佐藤慶太郎伝 東京府美術館を建てた石炭の神様』（石風社、2008）によると、佐藤慶太郎（1868～1940）は、若いころ法律家を志すも、病弱だったこともあり断念、石炭商となる。後に独立。妻・俊子の支えもあり、独立後も石炭の研究を続けた佐藤慶太郎は炭坑王と呼ばれるほど成長した。その後は持病の胃腸病が悪化し、経営の第一線からは身を引き、1918年（大正7）に若松市議会議長に就任した。

1921年（大正10）、連合会創設のために上京した際、「時事新報」社説で東京府美術館（現・東京都美術館）の建設計画が資金難のため頓挫しつつあることを知り、東京府知事・阿部浩に石炭商で築いた財産100万円（現在の約33億円相当）の寄付を申し出て東京府美術館を完成させた。

1925年（大正14）、胃腸病が悪化した佐藤は、友人の紹介で東京内務省所管の伝染病研究所へ向かい、二木謙三医学博士を訪ねた。特別な検査をするのではなく「食餌療法」をするように診断された佐藤は、二木の言葉を信用して即座に実行し、病弱だった体の健康を取り戻すことがで

きた。その後も佐藤は二木に薦められた宮入慶之助の著書『食べ方問題』を読み、本に書かれていたアメリカの実業家フレッチャーの咀嚼法、

- 一、仕事の後、おなかが、すいてすいて、食べずにおられなくなったときに食べる。
 - 二、食欲の好むにまかせて、食べたいものを食べる。食品の組み合わせには、あまり学術上の原則を気にかけない。
 - 三、口に入れた食物は、噛んで噛んで、とろとろになるまで唾液とまぜ、つるりと喉に流れ込むのを待つ。
 - 四、食事中は、心を舌に集め、ひたすら食べることを楽しむ。気にかかることがあっても一切考えない。おいしいという気持ちの赴くまま、何でもその人の口に合うものを食べる。
- といった4原則や、その他の健康改善法を実践し続けた。そしてその達成の喜びを多くの人と分かち合いたいと考え、健康生活の実現を社会に訴えることを自分の使命とするに至った。

佐藤は「富士山麓の聖者」と呼ばれた山下信義にも出会う。山下信義は農村に根ざした青年活動の指導者であり「石炭の神様」である佐藤と意気投合した。山下は佐藤に岸田軒造の著書『汗愛主義に建てるほんとうの暮らし方』を紹介した。山下の序文、

今や日本とのみ言はず、世界を挙げて人類は生活難に悩んで居る。けれども此の生活難は、単に之を経済的にのみ考へて幾ら手段方法を工夫して見た所で、それだけでは到底之を克服する事は出来ない。モット根本に遡つて、その生活理想を建て直すことによつてのみ、よく此の生活難を解決する事が出来るのである。岸田兄が、『生活維新』と呼ばれて居るのは、惟ふに人間が、今迄通りの生活態度をその儘続けて、之をちつとやそつと改善する位の事では追いつかない、よろしく根本的に、生活態度そのものを替へてかかる必要があるとの謂であらうと思ふ。私は全く同感である。

に感銘を受けた佐藤は『ほんとうの暮らし方』を普及することを決心した。

佐藤慶太郎、山下信義、岸田軒造ら3人は『ほんとうの暮らし方』の普及後、より実践の場を広げようとした。そこで食生活改善運動を含む国民生活刷新運動の指導者として、佐藤慶太郎自身が理事長となり、岸田軒造、山下信義を常務理事、渡辺竹四郎、加藤善徳（小説家下村湖人の弟子、後に佐藤慶太郎の伝記作者）、岸根寛次良、千葉明彦を職員とする生活研究所、佐藤新興生活館を設立、1935年3月1日に旗上げ式が行われた。「東京朝日新聞」(昭和10年5月14日付)には、「別府市天神町在住の佐藤慶太郎氏は語る——生活改善運動はあらゆる階級に亘り日本のみでなく世界人類のために改善運動を行ふ目的である。生活館の仕事としては精神、物資、道徳、経済等の各部門に分つて研究するもので自分が理事長になり社会事業に関係のある人々を中心に成つて働いてくれることになつて居る」という佐藤の言葉が記されている。⁶⁾

旗上げ式の後、佐藤は生活館機関紙『新興生活』を刊行した。

創刊号の冒頭「創刊の辞」には、「『新興生活』とは、今迄誰もが考へたことのなかつたと云ふ

やうな、新規奇抜な生活提唱ではありませぬ。『真理は永遠に新しい』意味に於ける『新興生活』の主張であります」と述べられている。佐藤の新興生活の考え方は、「陰悪、不安、動揺」の世相を憂うことから始め、「自己中心、営利第一主義」をやめること。そして、「愛と奉仕」を指導原理として「歓喜光明」の世界を創るように説くことである。それは、「新興生活綱領」の次の5項目によって示されている。

- 一、 新興生活は靈的厚生に出発す。
- 一、 新興生活は愛と犠牲と奉仕に生く。
- 一、 新興生活は力を実生活の合理化に注ぐ。
- 一、 新興生活は人と物と時とを活かす。
- 一、 新興生活は近きより遠くに及ぼす。

佐藤新興生活館の最大の目的は、「新興生活の指導に当る婦人を養成する」ことであり、それは「純真な心をもつて最も多く仕える生活を希望し、すべての才能も知識も用ひて人を幸福ならしめ、世の憂ひを底ひまで取り去らふとする奉仕の生活者を一人でも多く育てたい念願からである」という。生徒は25歳までの婦人で、高等女学校長又は婦人会長か女子青年団長の推薦を受けたものとしており、生徒は全員生活館で起居を共にする。修業期間は一年で、学科目は、調理や被服を中心とし、食物、住居、育児、家政、体育、修身、生活芸術があり、花嫁学校という認識ではなく、生活改善を目的とした学校であった。佐藤新興生活館が出版した『貯蓄報国生活費三割切下の提唱』（1938）には、「日本人の食糧は、野菜類を本位とし、豆類、海草類を従とし、これに肉類を付け加へる程度に使用するのが最も理想である」といった食事についての記述や、「住宅は、もう一間欲しいと思ふ程度の家が、最も適当である」「家賃は収入の一割位が理想だと、云はれたものだが、現今では一般勤労者階級のそれは、一割四、五分の負担になつて居る。二割を越すと、暮しに無理が行く」などの住宅に関する記述、「和服は、男子は筒袖、婦人は元禄袖型とすること。服装の改造は漸進主義とし、先づ、非活動的な袖の改造より着手したい」といった衣服等についての記述があり、新興生活館では衣食住について改善案を提唱し、女性たちを教育したことが知られる。また、健康についての改善案を提唱しており、

(イ) 家族挙つて、新興体操やラヂオ体操などで、合理的筋肉運動をして、体位の向上を図ること。

(ロ) 冷水浴や、皮膚摩擦等で、凝滞した血液の運行を盛んにさせること。

(ハ) 毎日数回、深呼吸を行つて、国民病と云はれる肺結核の予防に努めること。

(ニ) 家族揃つて野外に出で、無限の生命力の宿る清き日光と、清澄な空気に接すること。

などの健康法が勧められた。

佐藤新興生活館を佐藤と共に設立した山下信義も、『生活工夫（新興生活叢書第18輯）』（佐藤新興生活館、1937）で、「心の欲する処の生活、それは一体どんな生活であるか。先づ第一に我等の心そのものから吟味してかかる必要がある。バイブルには『心は詐るものにして何物よりも悪しきものなり』と書いてある」と述べている。

山下や佐藤らは、キリスト教精神に基づき指導方針を決定していた。山下は、「人間が金銭欲の刺激からでなくては働けぬなどと云ふことは、実に情ない話である。けれども貧すれば鈍し、窮すれば乱するが凡人の常である。そこで初めは金銭欲の刺激で働くもやむを得ないであらうが、いつまでもいつまでもそんな金銭欲の刺激などでばかり働いてゐるといふことは、まことに恥かしい話である。我等はもつと高い動機で働きたいものだ。人間の活動の一番高い動機は人類愛である」と、述べている。また、佐藤らは家庭の指導者となった女性が、子供の将来について考えることを望んでいた。「長男から始めて、二男、三男と、自分の子供を皆独立して食つて行ける様に育てあげ、娘もみんな腕で食つて行ける男子に嫁がせておけば、子供の生活問題については、全く安心である。心掛けのいい親は、みなこの方法による」「自分の子供を独立して生活出来る様に育てあげるのが親の第一の義務である。それが出来なんだ人は、いくら金持でも親としては落第生である」と、子供について考えるべきだと述べている。

佐藤新興生活館が設立してから間もなく、佐藤は流行性感冒にかかり、すべての遺産は社会事業に寄付するという遺言を残して、1940年（昭和15）に息を引き取った。そして、佐藤新興生活館は吉田俊男によって山の上ホテルへ生まれ変わることになる。

3.3. 佐藤新興生活館の時代背景

佐藤新興生活館が建設された大正・昭和初期は、和風生活から洋風生活への変化がおこった時代であった。そこでは、自由と開放、理想への気運が高まった。

また、健康ブームが到来し、肥田春充が生み出した独自の心身鍛錬法「肥田式強健術」や西勝造の宗教医学一体論を唱える総合的な健康法「西式健康法」などが提唱された。

そのような中、家政学が注目されたり、生活改善運動、住宅改良運動がおこる。生活改善運動と住宅改良運動については続稿で述べるとして、ここで触れておきたいのは、佐藤新興生活館が『新興生活叢書』を出版していたことである。叢書には様々な著者によって人々の生活について述べられており、日常の食生活や、住宅の買い方など詳細に記されている。（表1）

帝国森林会に勤めた本多静六は第21輯『幸福への道』で、健康を意識する生活について、「現在に感謝しつつ、粗衣粗食の簡易生活で、愉快に、朗かに、働き通す」「腹を空かして食べるは最良の理料番」と述べている。また、物の扱い方についても記述されており、物を貰った時は、「三分の一を家に残して、他を目下の者や近所の人に福分けする。物が多過ぎると得てして粗末になり易いもので、洵に『感謝は物の乏しきにあり』でありますから、沢山貰ふた時に福分けするのは、自他の幸福に貢献する尤も好ましい事であります」と述べており、物を贈った際は、「直に電話又は手紙で鄭重に礼を述べ、別に物を以て返礼する事は、特別の場合の外は致しません」と述べている。本多は物は大切に、適切に扱うべきであり、沢山贈り物を授かって持て余すのならば、他人に分け与えることが礼儀であり、両者の幸福であると考えたのであった。

表1 新興生活叢書一覧

目録	表題	著者
第1輯	生活計画	山下信義
第2輯	生活安定の鍵	岸田軒造
第3輯	農村文化の建設	山下信義
第4輯	日常の調理知識	永野健
第5輯	結婚読本	川崎利太
第6輯	物を活かせ	河口愛子
第7輯	冬の保健生活	原島進
第8輯	性格の自己教育	高良武久
第9輯	家庭和楽	川崎利太
第10輯	一事貫行	山下信義
第11輯	五人組制度の近代的復活	高橋刀畔
第12輯	結核病は治る	村尾圭介
第13輯	詩の農村を語る	白鳥省吾
第14輯	塗装・モザイク・セメント工	三好義春
第15輯	農村の生活調査	松井翠次郎
第16輯	夏の保健生活	原島進
第17輯	人間生活の意義	下村虎六郎
第18輯	生活工夫	山下信義
第19輯	非常時生活指針 前篇	生活館調査部
第20輯	非常時生活指針 後篇	生活館調査部
第21輯	幸福への道	本多静六

注

- 1) 「ヴォーリズのよる代表的教会建築——昭和初期の近代建築として——」（総研論集 14, 関西学院大学, 1993.3
- 2) 『ヴォーリズ建築事務所作品集』（城南書院, 1937）
- 3) 「神戸女学院新校舎建築の要素——設計者の言葉——」（神戸女学院同窓会誌「めぐみ」, 1933.7）
- 4) 「優しさと想像力を隠し持つ人物、ヴォーリズ」
<https://www.bookbang.jp/review/article/526536>
- 5) 特別展「山の上ホテル作家展 2017 ヴォーリズ建築としての山の上ホテル」（2017年8月15日～31日 於・山の上ホテル）展示資料
- 6) 森裕治『山の上ホテルの流儀 多くの作家に愛されてきた魅力とは』（河出書房新社, 2011）
- 7) 常盤新平『山の上ホテル物語』（白水社, 2007）
- 8) Twitter 2016年11月20日
<https://twitter.com/levinassien/status/800523590005231617>